

# 非道と淫虐の上意

陰謀の贄にされた父と  
淫欲の贄にされた母子

琴乃編 縄禿初潮水揚



濠門長恭

# 目次

一、	母子連座	三
二、	女郎修行	三
三、	童女水揚	三
四、	悦辱繩醉	三
五、	活花女郎	三
六、	悦虐座敷	三
七、	折檻身請	三
八、	姉上美慘	三
後書		

一、母子連座

御蔵番頭ばんがしらの小早川忠茂が行方知れずとなつた二日後には、八百兩を超す公金が消え失せていることが発覚した。即刻、小早川家は閉門に処され、妻の民江以下、嗣子佐太郎、長女綾乃、次女琴乃も蟄居を命じられた。

その日のうちに通い中間は消え失せ、住み込みの下女二人も巻き添えを恐れて口入屋へ逃げ帰り、屋敷には一家四人のほかは先代から仕えている年老いた用人ひとりだけとなった。武家長屋住まいの二人の郎党は寄りつきもしない。

翌日には、大目付が配下の手勢を引き連れて屋敷に乗り込み、秋霜烈日の断が下された。

上意

御蔵番頭小早川忠茂儀 八百余両の公金を拐帶せしばかりか長年にわたつて二千四百九十三両を着服せし不届きの段によつて士籍を削り而して死罪を申し付くる物也

直ちに討手を掛けて櫓權の及ぶ限り追ひ詰め屹度討ち果たすべし家族は之に連座して名を非人別改帳に移し以下の如く処する物也

一、民江儀

吟味の為入牢を申し付くる

一、嫡子佐太郎儀

精徳寺へ永代預かりとする

一、長女綾乃儀

処断は猶予し小早川追捕一行への同行を申し付くる

一、次女琴乃儀

奴やつことして舞華楼亭主に下げ渡すものとする

因って件の如し

死一等を免除されたのだから一見寛大な処置のようであるが、武家の妻子として死罪に処されるのではなく、非人に墮とされるのは、死罪よりもなお苛烈だった。

「それがしからも申し渡しておく」

平伏している四人の頭越しに、大目付が厳しい声を投げつけた。「もし一人たりとて命に服さず逃亡を試みれば、一家そろって市中引き回しのうえ磔に掛けるから、左様心得おけ」

琴乃には、上意書の文言の半分も意味がわからなかった。

父の罪に連座して家族も罰せられるという仕組には、疑いなど持っていない。

母が牢へ入れられて、父の所業についてあれこれ問い質されるのも、むしろ当たり前前だと思ふ。母は何も知らないという確信が、琴乃にはある。けれど、役人が母の言葉を信じなかつたら――母は責め問いに掛けられるのだろうか。そこに思い至ると、総身が鳥肌立った。

家門を断絶するため、嗣子を殺すのではなく仏門に入れる（妻帯を許さないから跡継ぎが出来ない）というのは、せめてもの温情に思える。

しかし、姉への処遇が不可解だった。罪人の家族が追手に加わるなんて前代未聞だ。なんとしてでも追手の足を引っ張るだろうとは、御上は考えないのだろうか。

そして、琴乃自身についても。琴乃は、奴というのは中間のことだとしか知らない。男の形なりをさせられて、力仕事とかにこき使われ

るのかしらと、それくらいにしか思いは及ばなかった。  
大目付の後ろに控えていた下役人が動いて、琴乃の想念は断ち切られた。

平伏していた母と兄が引き起こされて、縄が掛けられていく。母は手首を後ろで縛られて、首と胴に巻かれた縄と、袖を絞って縛された二の腕を結んで、身体の前に大きな菱形が作られた。兄は背中を腕を折り曲げて重ねられ、十文字に縛られている。  
兄を縛り終えた下役人が、琴乃の肩に手を掛けた。

「やめて：：縛らないで」

怯えが小さな悲鳴になった。

「御上のなさることです。おとなしくしていなさい」

母にたしなめられて、琴乃は観念した。

腕を剥き出しにされ、前で手首を合わせて縛られた。縄尻で首を巻かれて、腕を斜め前へ突き出した形にされた。腰にも、別の縄が

卷かれた。

「引つ立てい」

腰縄を引かれて、琴乃は立った。母、兄の順で座敷から引き出される。

竹矢来で封じられた表門の脇口から、三人は引き出された。が、そこで足留めをされた。

三人と入れ替わるように、浪人の風体をした者を交えた武士が四人、屋敷へ踏み込んだのにも、琴乃は気づかない。

「母上……」

母も兄も目の前にいるというのに、琴乃は心細さで気を失いそうだった。

民江が振り返って、目に涙を湛えて、ジッと娘の顔を見つめる。

「まだ●三(※)だというのに……不憫な」

もちろん民江は、奴とは奴婢のことであると承知している。舞華



楼が、御城下で一二を争う遊郭であることも。

この時代。琴乃くらいの歳で嫁入りする娘も珍しくはない。しかし、閨の所作に応えられる身体になるまでは、すくなくとも血の道が通じるまでは、形ばかりの夫婦でしかない。それなのに琴乃は――いきなり男女の秘め事を無理強いされて、しかも夜毎に別の男に抱かれる。哀れとも悲惨とも、言葉に尽くせない。

そんな思ひは胸の奥底へ沈めて。しかし涙までは隠しようがない。「これが生き別れになるかもしれない。武家の娘であるとか、三百五十石の家格とかいったことは忘れて、先様にどのような仕打ちをされようとも耐えなさい。生きておればこそ、浮かぶ瀬もあるというものです」

琴乃は今にも泣きそうになるのをこらえて、母の顔を見上げた。考えていたよりもよほどむごい目に遭わされるらしいと、ようやくに気づいた。

通りすがった顔見知りの下女が、驚いた顔で立ちすくんで、そのまま動かなくなつた。向かいの竹田家から中間が一人と下女が一人、何事ならんと顔を出して、三人の緊縛姿をいつまでも眺め比べている。

ボツボツと野次馬が母子を取り巻き始める。見ず知らずの者どもではない。毎日のように顔を合わせる中間もいれば、御納戸役佐島様方のミツという名前まで知っている下女。どこの誰とまではわからない顔でも、一度ならずすれ違うくらいはしている。こちらの素性は知られていて、羞ずかしさはこの上もなかった。

いったい、いつまで晒し者にされているのかと、不安のなかに疑問が芽生えたとき。

うおおおおつ：：と、野次馬がどよめいた。野次馬たちが見ているほうへ琴乃が振り返ると、脇口に奇妙な人影が立ち尽くしていた。それは――湯文字一枚の裸身を縛された女人だった。その女人こ

それが姉だと気づいて、琴乃は頭を殴られたような衝撃を受けた。

「ひどい……姉様、おかわいそう」

こらえていた涙が堰を切って、琴乃はワツと泣き崩れた。

「なにゆえ、このようなむごい仕打ちをなさるのです」

民江が大目付に言葉烈しく詰め寄ろうとして、下役人に腰縄で引き戻された。

綾乃を引っ立てていた四人の武士のひとりが高札を地面に突き立てた。

その文言を読んで、琴乃は卒倒しかけた。

此娘儀 父親公金拐帯に付見せしめに引き回す物也

小早川忠茂 身の丈五尺六寸 瘦身 四十歳 稍若く見える

右眼横に小粒黒子右手甲に火傷痕有り

在所を報せし者に金拾両を与える物也

「姉で父をおびき出そうとは——卑劣な！」

高札を手にしている長身瘦軀の男に佐太郎が激した声をあげた。

佐太郎の怒りを気にかけるふうもなく、四人のうちではただひとりきちんとした身なりの若い男が、大目付に呼びかける。

「一同打ち揃いましたからには、早速にそれぞれの場へ曳くべきと存じます」

「うむ」

長身瘦軀が高札を綾乃の背中に立てた。首縄を通してから、手首と背中の間に根元をねじ込み、縄を足して腹をくびった。

「く……」

姉は、母とも妹とも違う縛られ方をしていた。乳の上下を嚴重に締め付けられている。そこへ腹をくびる縄が加わって、息も満足にできないのではないかしら——琴乃は、裸身を晒す羞恥よりも、そちらを気づかった。

ピシリと、縄尻で後ろから湯文字を叩かれて。羞恥と憤怒に全身を赤く染めて、綾乃が歩き始めた。四人が綾乃を囲む。民江と琴乃が下役人に縄尻を引かれて、その後が続いた。

兄の佐太郎は、琴乃達とは真反対の方角へ、大目付直々に引つ立てられて行く。

野次馬の顔を見るのも、縄で雁字搦めにされた姉の裸の背中を目に入れるのも、琴乃には耐えられなかった。目の前でキツチリと縛り合わされた腕を見つめながら歩いた。

腕で釣り合いを取れぬというのは、ひどく歩きにくい。履物も与えられずに引き出されたので、足袋のままというのも勝手が違う。いつそ姉様のように素足なら、まだ歩きやすいのではなからうかと思ってしまう。

武家町から町人町へ入ると、野次馬の数がずんと増えた。しかし、誰も彼もが綾乃の裸身に気を奪われて、民江と琴乃にはおざなりな

目すら向けない。

琴乃は黙々と（転ばぬことだけを心掛けて）歩いている。縄目の恥辱、あるいはこの先の成り行き——そういった事どもを、まったく考えられない。我が身に降って湧いた出来事も、姉の裸身も、まるきり悪い夢を見ているようにしか思えないのだった。

やがて、母が姉妹とは別の方角へ曳かれて別れ、街はずれまで来たところで姉とも引き離された。姉は、そのまま真っすぐ街道を進まされ、琴乃は街境をグルリと回って、ひどく色使いの華やかな場所へ引き入れられた。

人の出入りはあるが、何かを商っているようにも見えない大きな屋敷が向かい合って、そのまわりに、見世でも長屋でもなさそうな建物が並んでいる。

大目付配下の侍と下役人とに曳かれて、琴乃は大きな屋敷の表から中へ連れ込まれた。

入つてすぐの広い板の間には、十人からの男女が畏まっている。真ん中の中年夫婦が、この店の亭主と妻女らしい。あとは三人の若い衆と、三人の女達。

「大罪人小早川忠茂が次女琴乃を舞華楼亭主権田庄衛門に下げ渡す。如何様に扱おうと勝手なれど、構えて逃失させぬよう心得るべし」亭主がいつそう平伏し、土間に下りた若い衆が膝を突いて、琴乃を縛した縄尻を恭しく押し頂いた。

女衞が女を引き渡すのは裏口でと定まっているが、御役人にはそうもいかず。なによりも、元武家の生娘を仕入れたという宣伝にもなる。もつとも。綾乃の裸身にくつついて行った連中の四半分にも満たない野次馬連も、この娘が新造として突き出されるのは、禿かむろとして何年も修行を積み、蓄も半開きになってからと思ひ込んでいる

から、今夜からでも店が繁盛するというわけではないのだが。

ともかくも、こうして——三百五十石取りという中級武士の娘は、女郎に墮とされたのだった。

「●三と聞いていたから、すぐにでも使えるかと思つていたが——まるきりの餓鬼だな。これじゃあ、血の道も開けてはおるまい」

早々に役人が引き上げると。ひとりだけ紋付き袴を着けた五十絡みの亭主が、苦り切った顔で吐き捨てた。

「どうなんだい。もう月の障りはあるのかい？」

女房が斬りつけるように尋ねた。

「え：：なんのことでしよう？」

それでじゆうぶんな答えになつていた。

「まあ、よかろう。あのお方は何もかも御存じで所望されたんだらう。しかし、他の客はそうも付くまい」



亭主が嘆息した。が、そこで形を改めて。

「元の身分はどうあれ、今日からおまえはうちの売り物だ。そのことを、よおつくわきまえておきなさい」

琴乃はポカンとしている。

「えい、七面倒臭い。夕霧、諸訳しよわけはあとでおまえから教えてやって

おくれ。今は——おい、ツリブリの支度は出来ているな」

「へい。すぐにでも始められます」

「妓達も皆集めろ」

目の前で何事が起きているかもわからぬまま、縄もほどいてもらえず、琴乃は奥へ曳かれて行って——目の前で引き戸が開けられるなり、その場で立ちすくんだ。

姉よりも幾つか年上に見える娘が、丸裸で手足を括られて、剥き出しの梁から吊るされていた。娘は顎をのけぞらせて目を閉じてい

る。

「サツサと入りなさい」

琴乃は肩をつかまれて、吊るされている娘のすぐ近くまで押し込まれた。

「こいつはな、三日前に欠け落ちをして、その夜のうちに捕まえたのだが——おまえが来るといふので、折檻を先延ばしにしてきたのだよ。逆らったり逃げたりすればどうなるか、シツカリ見覚えて心に刻んでおきなさい」

琴乃は目の前で背中を下にして吊られている娘に目も心も奪われていて、亭主の言葉も耳に入っていない。三日前といえば小早川が逐電した当日で、まだ公金拐帯の事実すら露見していない。それなのに琴乃の処分が決まっていたという矛盾に、気づくどころではなかった。

二十人ほどの娘たちが、ゾロゾロと部屋へ入ってきた。吊られて

いる娘よりずっと年上もいれば、琴乃より稚い童女までいた。まるで寝起きのように、娘たちは小袖やお仕着せを着崩している――のは、まだ行儀の良いほうで、襦袢姿も交じている。娘たちは、壁に貼り付くようにして、吊られている裸身を取り囲んだ。いや、取り囲まされた。

琴乃も、いまだ手を縛られたまま、娘たちの輪に押し込まれた。六尺禪の上に黒無地一重の印半纏をまとった男が二人、吊るされた娘の左右に立った。青竹を裂いて麻紐で巻き直した一尺半余（五十センチ）の得物を手にしている。

「やれ」

亭主が短く命じると、二人同時に青竹を振り上げて。

ビシッ！ バチイン！

娘の尻と太腿に叩きつけた。

「ぎびいいっ！」

獣が吠えるような悲鳴が、娘の喉から噴きこぼれた。

思わずそむけた顔を、琴乃は顎をつかんで引き戻された。

「ちやんと見なさい。初手から言いつけに逆らうようなら、おまえもあそこに裸で吊るされるんだよ」

亭主の言葉は柔らかかったが、それだけに琴乃は魂の底から震え上がった。

ビシッ！　バチイン！

「ぎやああっ……！」

二発目は両側から脇腹に叩きつけられた。

男たちは表情を動かしてもせず、掬い上げるようにして背中を打つた。

「ぎひいいっ……あちきが悪うござんした。御亭さん……此度こたびばかりは、堪忍してくんなまし」

亭主は無言。四たび、二本の青竹が狸縛りに吊るされた裸身を打つた。

「ぎやばあつ……！」

裸身が小さく跳ねて、そのまま一寸ばかりも下へ垂れたように見えた。気を失ったのだ。

しかし、足抜けへの折檻がこれしきで終わるはずもなかった。たっぷりと水を吸わせた大きな雑巾が、娘の顔に押しつけられた。たちまち水を吸い込んで、娘はゲホゲホと意識を取り戻した。むせているのもかまわず、五発目が娘を襲った。

「後生ざんす……どうぞ、どうぞ、もう……！」

哀願への答えは、六発目の打擲。七発目は両側から脇腹に先端を突き入れられた。

さらに立て続けに十五発まで敲かれたとき。

「柏木は二日の余も、おまんまを抜かれていんす。弱った身体にツ

リブリはこたえませえ」

年嵩の娘が、亭主に向かつてのんびりとした口調で訴えかけた。

「ずいぶんと出しゃばった口を利くね」

「この夕霧。御職を張るからには、朋輩をかばうのも役目のひとつでござんす」

亭主が薄嗤いを浮かべて、夕霧という源氏名の女郎を見据えた。

「稼ぎ頭の顔に免じて赦してやらぬでもないが……おまえの手で鐘を撞いてもらおうよ。それでいいね」

「よござんす」

キツパリと答えて、夕霧が前に進み出た。

小袖をシャキツと着直して。若い衆から木槍のような長さ一間（百八十センチ※）の得物を受け取って、穂先を突き出す形に構えた。

そのぎこちない姿から、夕霧には武術の心得がまったくないと、琴乃にも見て取れる。が、それ以上に、槍穂の異様さに目を奪われ

ていた。

長さは一尺（三十センチ※）、太さは二寸（六センチ）余り。根元から三寸ほどのところに小さな鏝があり、そこからは先細りになつていて、先端は丸められている。

どのようなに使うのか、見当がつかなかった――のは、夕霧が吊るされてゐる娘の後ろに立って、尻の谷間に穂先をあてがうまでたつた。

あんな物をお尻の穴に突っ込まれる（としか、琴乃には考えられない）くらいなら……死ぬまで敲かれたほうが、まだしもだと思つた。

夕霧が木槍を構えたまま二歩下がった。

「堪忍してくんなまし！」

悲痛に叫んで、グイと木槍を突き出した。

「いぎやああ……！！」

これまで以上の絶叫。槍穂の鏝が尻肉に突き当たって、吊られた娘が前へ押される。夕霧が木槍を引き抜くと、裸身が振り子のよう  
に揺れ始めた。

夕霧は肩で息をしながら、揺れている一点に目を凝らす。裸身が  
手前に振れて止まった一瞬を狙って、木槍を突き出した。

グボツ……穴を穿つ音が、琴乃の耳にまで届いた。

「ぶぼうっ……！」

穂先が胃の腑まで突き上げたのか、吊るされている娘は口から薄  
黄色い水を噴いた。裸身はいっそう大きく揺れる。

「御亭さん……」

夕霧が亭主を振り返った。亭主は首を横に振る。

ふたたび構えて、朋輩の身体に木槍を突き込む夕霧。蒼白の顔の  
中で目は吊り上がり、歯は食い縛られている。

三度目の突きで、ふたたび裸身が一寸ほど下がり下がつた。



木槍を引いて立ち尽くす夕霧に、亭主が静かに命じる。

「そのまま続けなさい。むしろ、それが慈悲というものです」

「……鬼」

低い声で吐き捨てて、夕霧は折檻を続ける。

都合十度の『鐘撞』で、ようやく夕霧は赦された。吊られた娘は、  
氣を失ったまま打ち捨てられる。

「ツリブリは、ここまでだよ。さあ、部屋へ戻って口開けの支度に  
掛かりなさい」

ホウツと、溜息が折檻部屋に満ちて。ゾロゾロと娘たちが出てい  
く。

「おまえは、こっちですよ」

亭主が琴乃の腰縄を曳いた。

屋敷の奥まった部屋に琴乃は引き入れられた。八畳の真ん中に長  
火鉢と文机が鉤形に並べられている。

神棚が祀られてあるの、商家の奥向など知らない琴乃にも、そこが主人の居間だとわかる。

ここでようやく、琴乃は縛めを解かれた。

わずかに痺れて痛む手首をさすりながら、琴乃は戸惑っていた。いつまでも立ったままでは行儀が悪い。とはいえ、勝手に座るのも礼儀に反する。

「それじゃ、身体を見せてもらおう。おべべを脱いで丸裸になりなさい」

エツ：：と、顔をあげる琴乃。

亭主は蓋をした長火鉢の奥に陣取り、女将は琴乃の横で片膝立ちに座っている。

折檻部屋での無惨な光景を見せつけられたあとでは、耳を疑う余地もない。しかし。見ず知らずの男の目に肌を晒すなど、出来るはずもない。

「ひとりで出来ないのなら、亡人に手伝わせるよ。それとも、柏木と並んで吊るしてやろうか」

女将の声には、上辺だけの優しさすらなかった。

琴乃は、慌てて帯に手を掛けた。

辱められるくらいなら、及ばぬまでも手向かうか、いつそ自害するか——そこまでの覚悟が、●三歳の娘に出来ようはずもない。

羞恥と恐怖に指が震えて、帯締めすらも満足にほどけない。

鬼の夫婦はのんびりと構えて、生贄の悪戦苦闘ぶりを眺めている。——のではなく。羞じらいの度合いを見定めようとしている。もち

ろん、それは『商品』を売り出すときの参考になる。

いつか、琴乃はしゃくりあげていた。しゃくりあげながら、どうにかして肌襦袢まで脱いだ。

琴乃が立ち尽くしたまま、わずかに膨らみを帯びてきた胸を両手で抱いているのは、羞恥の故ではない。肌を晒すのはもちろん羞ず

かしいことではあるが、乳房だからといって取り立てて隠す習慣は、この時代の女にはなかった。琴乃の仕草は、怯えに発していた。

「どうして、手を止めるんだね？」

「おっしやるとおり、ちゃんとハ、ハダカになりました」

「それじゃ、腰にまとわりついてる布切れは、なんなんだい？」

女将の言葉は意地悪く鋭い。

「あの……でも……」

湯文字一枚の裸を縛られて街中を引き回されている姉の後ろ姿を、琴乃は思い出している。それよりも羞ずかしい形になれと、この人達は命じているのだ。

琴乃は朱色から蒼白に変じた顔をうつむけて、わななく指で細い腰紐をつかんだ。大粒の涙が、ボロボロと畳にこぼれる。

腰紐をほどいて。意を決して、琴乃は最後の布をみずからの手で剥ぎ取った。

「隠すんじゃないよ。手は後ろで組んどきな」

前へまわそうとしていた手がビクツと止まって、オズオズと後ろへ隠された。まったく無毛の、しかしプツクリと熟れ初めた木通あけびが、

鬼どもの目に晒された。

その股間に女将の手が伸びてきて、琴乃は後ずさりかけた。

「ジツとしとくんだよ」

「こいうときは相手の意を汲んで、言われずとも脚を開くくらいでなくちゃ、女郎は務まりませんよ」

女郎という言葉くらいは、中間などの与太話で耳にしたことはある。その意味は知らない。知らないけれども、琴乃は折檻部屋を恐れるあまりに、主人の言葉に従っていた。

「あつ：：い、痛い」

わずかに開きかけた木通の割れ目を指で穿たれて、琴乃は小さく

悲鳴をあげた。

指はしばらく木通を搔きまわしていたが、最初ほどには琴乃に痛みを感じさせず——じきに引き抜かれた。

「これなら大丈夫そうだね。新鉢あらばちを割っても砕けたりはしないだろうさ」

女将の言葉はサツパリわからないまでも、そんなに非道いことはされずに済みそうだと、幾分は安堵した琴乃だったが——もちろん間違っていた。

「夕霧を呼んどいで」

亭主が部屋の隅に声を掛けた。最初からいたのか、途中で入って来たのか、そこに童女が座っていた。

いや。歳は琴乃の上かもしれない。肩が隠れるくらいに髪を切り揃えているので、稚く見える。

「ああい」

少女が部屋を出て行って。すぐに夕霧を伴って戻った。

まだ仕上がってはいないものの、ザツクリと髪を結い上げた夕霧は、もはや娘とは呼べない立派な妓だった。

「この娘は、おまえが仕込んでくれ。五日ほどで店に出すから、そのつもりでな」

素顔の中で眉がひそめられた。

「里の諸訳も知らない小娘を水揚げさんすか。御見世の格に傷が付кинすよ」

「差し出口を聞くものではありませんよ。見世の格に見合うだけの作法を教えるのが、お前の役目です」

五十年も昔の吉原の太夫とは比ぶべくもないが、格子ともなるとそれなりの教養も身に付け、人情の機微にも通じている。主人の腹に一物あるくらいは容易に見抜けた。

「あいわかりんした。それではセッセと地娘に磨きを掛けるように致しんす」

「この娘は武家の出で行儀作法は身に付けているから、里の流儀に矯めるのは雑作もないでしょう。けれども、色の道はトンと疎いだろうから、そこらあたりを案配しておくれ」

「申すまでもござんせん。さ……」

夕霧が物問いたげな目を亭主に向けた。

「若紫（※）だ」

「ほんに、おっ母さんは高雅でござんすね」

皮肉には聞こえなかつたのだろう。女将は得意然としている。

夕霧はひそかに溜息をついてから。

「では、若紫。あちきについておいでなんし」

琴乃は、わけがわからないまま立ち尽くしている。

「おまいは、たった今から琴乃ではなく、若紫という名になりんし



た。そのつもりでおいでなんし」

わけはわかったが。まさか素っ裸で部屋を出るわけにもいかない。脱いで畳に落とした着物を拾い上げようとして、その手が止まった。湯文字一枚の他は、いつのまにか消えていた。隅に控えている娘の仕業だろう。

琴乃は黙って湯文字を腰に巻いた。

鬼の夫婦から一刻（※）も早く逃げ去りたかったけれど、この夕霧という女ひとも、鬼にそそのかされて同輩を折檻した女夜叉だ。行くも地獄、行かぬも地獄。暗然たる思いで、琴乃は女夜叉について行った。

ふた間ばかり表へ寄った小部屋へ足を踏み入れて、琴乃は目をしばたいた。赤や金色が氾濫している。そして、質実剛健の武家とは真反対の、精緻な飾りに縁どられた小さな箆筒や漆塗りの鏡台や

文机が部屋をグルリと囲んでいる。片隅に積み上げられた布団だけが、場違いにみすぼらしい。

「まずは、これを着なんし」

部屋の華美さに反して紺無地の着物を与えられて。袖を通してみて、ああそうなのかと琴乃は早合点した。丈は膝頭までしかなく筒袖。そして細帯。独楽鼠のように働く下女にふさわしい身形みなりだった。

部屋にはほかに二人、娘がひっそりと控えている。琴乃と同じみすぼらしい身形だ。

「この子は、あちき付になった若紫さんす」

夕霧の言葉に、二人の娘が鋭い視線を投げかけた。

敵意——と、琴乃は受け止めた。三千三百両ものお金を盗んだ者の娘が、歓迎されるはずもない。そう思い込んだ。

そんな一瞬の交錯に気づかぬかのように、夕霧が琴乃と同じ年頃

の娘に顔を向けた。

「この子は雲といいんす」

わずかに顔の向きを変えて。

「こっちは幸ゆき」

まだ『つ放れ』（※）していかないかもしれぬ。

「三人仲良くとは言いにくうざんすが、喧嘩は表も裏も有りの実ざんすよ」

無しでは縁起が悪いから有りの実という。つまり夕霧は――暴力沙汰はもちろん陰湿な苛めも無しと釘を刺したのだった。喧嘩をけしかけていると誤解したのは琴乃だけだった。

「すっかり手間暇いただきんした。さ、急ぎんしよう。若紫は、雲と幸の手際を見ておきなんし」

琴乃を部屋の隅へ追いやって、鏡台の前に座る夕霧。二人の少女

が、髪の仕上げにとりかかった。

「おまいは、ここがどういう見世か、知っていなさんすか？」

鏡を覗き込んだまま、夕霧が琴乃に問いかけた。

「……知りません。わたし、ここで奴さんみたいに働くのだと聞かされていきます」

二人の少女がコロコロと笑い声をあげた。

「やめなんし」

二人を叱りつけてから首をかしげる。

「ヤッコさん……ああ、お武家への奉公人もヤッコといいんすね。違いんす。おまいは、奴婢に落とされたざんす。非人の下の身分。売り買いされて、生かすも殺すも犯すも主人の意のまま。それを言え、ば、わっちらも同じざんしようがねえ」

その言葉が琴乃の中で意味を持つまでに、数呼吸の間があつた。それから。頭を殴られ全身が地の中にめり込んでいくような感覚に

囚われたのだった。

——小半時もして。結い上げた髪に櫛を二枚、簪を十何本かも飾り立て、黒地に赤と金を散らした大振袖、帯は前結び。琴乃には華麗というより目がチカチカする異装にしか見えぬ装いで、夕霧が部屋を出て行った。

去り際に文箱の底から絵草子を取り出して、琴乃に手渡した。

「これを見て読んで、よつく頭に入れなんし」

『男女極楽法悦手引』と表紙にある。

「ほら、めくってみんしよ」

年上の雲が、琴乃の肩をつついた。

「いわれるがままに表紙を繰って——」

「きやつ……」

放り出してしまった。一糸まとわぬ男女が絡み合って——男の股

間から伸びた子供の腕ほどもありそうな何かが女の股間に突き刺さっている。姉と同じように、男女の媾合いのなんたるかをまったく知らない琴乃だったが、いきなりの理解を得たのだった。

「きや、ではありんせん」  
夕霧が怖い顔で振り返った。

「あちき等<sup>ら</sup>は、夜毎にこのようなことをして、身体を男衆<sup>おとこし</sup>に嬲られて、生かされておりんす。おまいは字も読めるはず。絵だけではない、書かれてあることも諳んじなんし」

琴乃は、まだ呆然としている。  
夕霧が腰をかがめて絵草子を拾い、それを琴乃の手に押しつけた。  
琴乃には、再度放り出す気力はない。というよりも——もつと詳しく見てみたい。なにが書いてあるか読んでみたいという心持ちに

なりかけていた。

「それじゃ、おいらも支度しんす」

二人の少女はパッと着物を脱いで短い湯文字ひとつになると、部屋の隅から粗末な鏡台を引き出して、化粧を始めた。幸はようやく肩に掛かった髪を、雲はもうすこし長い髪を梳り、左右をひとつずつ赤い布で結んで、顔には白粉、唇には紅。桐の葉を丸くかたどった紋を入れた小振袖に、帯は普通に後ろでふくら雀に結んで。里の掟は厳しゆうござんす。勝手にうろつくと、おまいが折檻されるだけじゃござりんせん。おいらにもお咎めがいきんす」

禁足を言い渡すと、襖を開け放したまま部屋を出て行った。

小半時ほど、琴乃は絵草子を膝に置いて座り込んでいた。朝から身の上はめまぐるしく転変して、今はきらびやかな牢獄の中。裸に縄打たれた姉の後ろ姿がときおり頭に浮かぶ。母にも兄にも思いは至らない。

廊下を行き来する足音。ヒョイとこちらを覗き込む女は、皆それぞれに着飾り薄化粧をしている。琴乃の顔をチラッと、あるいはシゲシゲと眺めて、無言で立ち去る。

見世物にされているみたいで、けれど勝手に襖を締めてよいのか判じかねて、部屋の隅へ逃げ込んだ。そして、コワゴワと絵草子をめくった。

今度は慎重に一枚ずつめくったので、いきなり男女媾合の図が現われたりはしなかった。

夫れ伊邪那岐伊邪那美の古より男は女を慈しみ女は男に傳きて心身相和し女孕みて十月十日を経なば女陰より赤子の……

パパパツとめくって。さっきとは別の構図が目飛び込んできた。仰臥した女が膝を立てて脚を開き、そこに男がおおいかぶさっている。『本手掛』と、絵図の右上に書いてある。

もつとも初歩の形なり。先ず女はこのような形に為す。媾合難



ければ枕を差し入れて腰を持ち上げるも良し。男は……  
琴乃は食い入るように文字を追っていく。まったく知らなかった  
男女の究極の秘め事に好奇心が湧いただけではない。ハッキリと胸  
に妖しいときめきを感じた。ばかりか、腰の奥がじわあつと熱くな  
る不思議な感覚が芽生えていた。そして、なによりも。遅かれ早か  
れ、我が身にもこのようなことをされるのだと思うと、真剣になら  
ざるを得ない。

こんな太い物が、わたしの股座の割れ目にはいるのだろうか――  
と、不安にもなってくる。そして、様々な形を見ていくうちに。

「あつ……もしかして？」

折檻部屋での『鐘撞』を思い出しいた。あの奇妙な形をした穂先  
は、お尻の穴ではなく、ここに突き挿れられたのではなかっただろ  
うかと思ひ当たった。

妖しいときめきの奥で、不安が渦巻き始めた。折檻というからに

は、あれは女の身体を痛めつける行為のはずだ。では、これも……？  
「おやおや。ずんと身が入っておりんすえ」

ハッと顔を上げると、敷居の向こうに夕霧が立っていた。中休みに戻って来たのだった。

慌てて絵草子を閉じる琴乃。

「それだけ熱心なら、あちきも教え甲斐がありんす」  
琴乃は顔を赤くした。

「あの……」

いつまでも羞ずかしがっているときではないと、琴乃は意を決した。

「こうすれば女が悦ぶとか、け、け、結合深ければ戯戯の声をあげるとか——ここに書いてあることは、まことなのでしようか？」

夕霧が浅くうなずいたのは、問いに答えたと同時に、琴乃が媾合いに嫌悪を示していないことへの安心からでもあつた。

「初回は、身体をふたつに引き裂かれるほど痛いというて泣く娘もおりんす。さきほどの『鐘撞』のように、濡れてもおりんせんところへ突き立てられれば、死ぬほどの苦しみさんす。けれど……」  
初回は辛抱するしかない。辛抱するうちに、だんだんと味を覚えてくる。そして、男に乱暴されぬよう、ベタベタと甘えてみたり、慣れてくれば我が手で男を導いたり——  
「剣術と同じさんす。慣れぬうちは打ち叩かれて、おいおいに上達していきんす」  
夕霧は琴乃に向かい合って座ると、その手から絵草子を取り上げた。

「ねやごと閨事の目学びは、後でさせてあげんす。ちつとばかし、里言葉を  
躰けんしよう」

廓の妓は、地女と同じ言葉を使つてはいけな。言葉の尻だけで

はない、上げ下げも違う。さまざまな言い換えもある。客が去るのは良くないから、得エてとテいう。スルメではなくアタリメ。

「ここいらは、町の男衆も使いなんすが」  
本音、本心はシンネ、お酒はイサミ、我に付いた客は又シサマ、  
そうでなければソサマ、男の対手になる妓はテキ（ソサマのテキは  
誰さんすか、などと使う）∴∴聞いているうちに、琴乃は頭がクラ  
クラしてきた。

漢詩の素読など願い下げだと兄が言っていたのを思い出して、こ  
ういうことだったかと得心した。

夕霧がとくに厳しく教えたのは、人称の使い分けだった。見世に  
出ている女郎は、アチキ、アツチ、アチシ、ワチキなどわりと好き  
にできるが、水揚げ前の禿はオイラとしか言っではいけない。  
相手への呼び掛けも厳しく定められている。妓楼の亭主は、オテ

イサン。女将さんは、オツカサン。

「鬼母さんすがね」

朋輩や目下の者へはオマイ、オマイサン。目上格はアネサマ。夕霧は琴乃からみればオイラのアネサマだからオイラン。お江戸とかじゃ格子の上に花魁がいんすが、こつちじゃ格子がてっぺんさんす」

ここで、ことさらに夕霧が声をひそめた。

花魁ともなると、この店で客を取るわけにはいかない。客は揚屋で待ち、花魁は禿やら新造、遣手を引き連れ、花街を練り歩いて揚屋へ向かう。手間暇かかるし、客も目玉が五、六回は飛び出るほどの揚げ代やら祝儀やらが出ていく。それほど散財ができる御大尽は、この御城下に二人といるかどうか。結局は、そこそこに格式張って、それでも回しを取ることにささえある格子を抱えるのが関の山なのだ——琴乃に教えた。

琴乃にしてみれば、頭クラクラがグワラングワランになっただけなのだけれど。この人は鬼夫婦の手先ではなさそうだと、そんなふうに思えてきた。

### ※数え歳

生まれたときを一歳として、年が改まるごとに増やしていきま  
す。大晦日に生まれた子は、生後二日で二歳になるのです。  
綾乃は長月（旧暦九月）、琴乃は神無月（旧暦十一月）の生まれ  
です。物語の現時点は弥生（旧暦三月）。ふたりの満年齢は、読  
者各位で計算してください。

### ※単位換算について

一間は正確には一八一・八一センチ、一尺は三〇・三センチで  
すが、有効数字を考慮して、本文中のように表記します。

※若紫

『舞華楼』では源氏物語の各帖から源氏名を採っています。禿の雲は水揚げが終わると薄雲、幸は御幸に改名します。もちろん若紫は、言わずと知れた日本最古のロリータです。

※一刻

こういう言い回しで使うのは、一日を百刻に分けた、主として暦学者などが使っていた時間単位です（一刻は十四分二十四秒）。いくら昔はのんびりしていたとはいえ、三十分や一時間がどうでもいいわけがありません。

作品中では、この時代に日常で使われていた時間単位は「時とき」と表記します。

※ つ放ばなれ

ひとつ、ふたつ………こここのつ。ここから先は『つ』が無くなり  
ます。